

小説・神尾丈治
イラスト・サクマ侘貴

惚れ症の ハーフエルフさん

Halfelves of Fall in Love



試し読み版



Kiss Time Communication Presents
Beginning Novels Series

“Halfelves of Fall in love”

- Volume One -

Contents

第 一 章 ● 追憶と再会	005
第 二 章 ● 迷宮とドラゴン	075
第 三 章 ● マスターナイト	147
第 四 章 ● 砂漠の復路	207
第 五 章 ● 守るべき絆	327
特別編 1 ● あいつらのせいで	378
特別編 2 ● 沼と緑の途上で	382

第一章 追憶と再会

幼い頃の俺は、ポルカという辺境の街に住んでいた。

一年の半分は一面真っ白になる豪雪地帯で、周囲にはほとんど街らしきものはなく、見渡す限りの原野と針葉樹林が広がっている。

気候のために当然農業は盛んでなく、周りの森は魔物が多いことで有名で、まあ普通に考えたら呆えそうにない街だったが、ひとつだけどこにもない名物があった。

「ポルカの霊泉」という冬でも凍らない不思議な湧き水だ。街のあちらこちらで湧いているこの水はものすごい治癒の霊験がある。その効果は病気から怪我から何にでも効く。森の魔物に襲われて脇腹半分食いちぎられた兵士がこの水を飲んだら完治したという話もあるぐらいだ。

欠点は、湧いたのを汲んでから大体半日もするとただの水になってしまうことだったけれど、おかげで街はいつも病や怪我を抱えた巡礼者で賑わっていたし、水自体を出し惜しみされることはなかった。

そしてこの霊泉、実は地元の間には有名だが温泉もある。

そののは特に女性の肌を若返らせるっていうんで大人気だった。

ポルカの50歳はよそでの30歳って言われるぐらいだ。雪国で色白美人の多い土地柄、もう温泉は天国のような風景だった。

そしてそこで俺は覗きの常習犯だった。

「ん？ ……あつ、コラッ！」

「また鍛冶屋のアンディよっ!!」

花屋の姉ちゃんと酒場の娘に見つかって雪球を投げつけられる。

俺は雪の上を手製のソリで大脱出するのが得意技だった。「鍛冶屋のエロガキ」とやたら有名だったが、専ら怒るのは若い娘ばかりで奥さんおばさんは笑って済ませてくれた。まあ田舎だったし徴兵で男が少ない時期だったから、男はむしろ好色なぐらいが頼もしい、とか大らかな見解だったみたいだ。

それに前述の通り、おばさんといえ霊泉効果で充分イケるボディの持ち主ばかりだったわけで、俺としてはウハウハだったわけだが。

その日も花屋のジェシカに雪球ぶん投げられつつ雪の上を滑走していた。

が、ソリが何か通った跡に引っかかってつんのめり、雪の中に放り出された。

「ぐわっ!？」

ばふつと体が沈み込み、一瞬パニックになる。

1 mも積もった雪に体はまると結構怖い。ブザマにじたばたしてようやく体を起こし、ソリを探してキョロキョロすると、ちよつと怖い状況なのに気づいた。

引っかかった「何かの通った跡」は、森から続いている。そしてその跡は、10 mも離れていないところに先端がある。

「……う、うわっ」

温泉があるのは街の郊外で、実は魔物が出やすくもあつた。

そして森へはちゃんと整備された入り口がある。それを無視して関係ないところから出てきた「何か」が、人間でない危険は充分にあつた。

しかし。

「……あのっ」

即席の通り道から歩きにくそうに戻ってきたのは、亜人だつた。

「エルフ……?」

「い、いえ、その」

長い耳は森の亜人、エルフのもの。しかしポルカの近く
のエルフは頑なに人間と交易したがらず、お互いに不干渉
が暗黙の了解だつた。

そのエルフがわざわざ、何をしに……と思つていると、
亜人は言いにくそうに切り出した。

「霊泉の水を下さい。友達が、死んじやいそうなんです」

「も、森の霊泉は?」

「……貰えなかつたんです。私たち、半分だから」

ようやくピンときた。

「そっか、ハーフエルフなんだ」

「ええ」

エルフは縄張り意識の強い種族で、自分たちの集落と無
関係の者を縄張りからとことん排除したがる傾向がある。

一方で、このトロット王国の人間は亜人には結構寛容だ
が、ことエルフに関しては相当痛い目に遭わされている。

まあ野放図に森を拓いて街だの村だの作つてはエルフに
追い出されたり焼き払われたりしているわけだが、ほぼ一
切の警告もなく、情け容赦のない弓矢の狙撃でさくさくと
殺されている事実は、エルフに対する恐怖心や敵愾心を育
てるのに充分だつた。

そんな中、混血のハーフエルフの肩身の狭さは亜人の中

でも図抜けたものだ。

何しろ耳が長い。純粋なエルフよりは短いらしいが、面と向かってエルフを見た奴なんてほとんどいないわけ、どうしたってエルフと見分けることはできない。それで警戒されるし、人によっては仲間を殺したエルフに対して殺意だって抱く。

おかげで森でも街でも影のように生活せざるを得ない。可哀相だが、種族紛争がなんともならない以上決してどうにもならない犠牲者たちだった。

「街で泉守りに頼めばちよつとした手数料だけで祝福までしてくれるよ」

「お金、なくて……それに街に入れそうにないんです」

「ドワーフやハーフオーガが出入りしてるぐらいだから、いけそうなものだけだな」

子供ゆえの無思慮をそのまま口に出すと、ハーフエルフの少女は辛そうに笑った。

見た目バケモノなオーガ族でさえ力仕事の担い手として出入りが認められていたが、ハーフエルフは当時本当にポルカに入れなかったのだ。

「お願いします。なんでもしますから……私にできることなら！」

「……うーん」

なんでもと言われても困る。

街に入れもしない、金もない。特に芸がありそうにも見えない。

耳が長いだけの年上に見える少女。

泉守りを通さなくても、すぐ近くに温泉があるわけを持つてくるのは造作もないことだったけれど、なんでもしませうと言われてタダで働くのはちよつと惜しい。

考えに考えて、スケベ小僧の魂がボンと名案を出した。

「……なんでもつつつたね？」

「え、ええ……ひとの命、かかってますから。私にできるなら、本当になんでも」

「う」

ちよつとだけ罪悪感が湧いたが、しかし言つて損することもないと思ひ直す。

「裸になって、めいっばいからだ触らせて」

「え」

さすがにギョツとしたようだった。今考えても我ながら天晴れすぎるスケベ根性だと思ふ。

「え、ええと……」

少女の目が泳ぐ。無意識といった感じで身を掻き抱き、真っ赤になって俯いてしまった。さすがに単刀直入すぎたか。

「嫌ならいいけど」

まあ駄目元だ。それ以外でと言われても……ちよつとがっかりだけれど別によかった。じゃあばんつとか貰うのはアリかな、と思つた程度で。

しかし少女は大慌てした。

「し、します！ 構いません、裸にでもなんでもなりますからっ！」

「あ……そう？」

今考えると、俺の言い方が「じゃあ霊泉の水は諦めてね、ばいばい」とでも言いそうに聞こえたのかもしれない。

そんなつもりはなかつたが、俺のスケベな条件を聞いてくれたからには特になんとも思うことなく、俺は大喜びした。

「で、でも……せめて、もう少し暖かいところで……」

「うんうん」

こうなると俺の脳味噌は余計に働く。

自分より頭ひとつ分大きい少女を引き連れて、ソリを引きずりながら雪の丘に登り始めた。

温泉浴場の営業時間は寺院の十の鐘までになっている。六の鐘が真昼、十二の鐘が真夜中なので、都会式に言うところ夜8時というところ。

それ以降もちろん泉が止まるわけでもないので入ろうと思えば入れる。単に管理する泉守りが、かがり火の薪代をケチっているだけだ。

まあ温泉の泉守りは儲からない（入浴料を取ろうとしたこともあるけど、街中の女衆の反対にあつたので助成金だけでやってるらしい）ので仕方ないといえれば仕方ないみただが。

どうせ湯船の掃除は朝なので、それまでは掛け流しのまま。暗いことさえ我慢すればいいのだ。

暗いならエルフだろうがなんだろうが見つかる心配もない。夜目の利くドワーフやオーガなら見えてしまうかもしれないが、奴らはそもそも風呂の習慣がない。

「というわけで混浴混浴♪」

「……はあ」

ハーフエルフの少女は呆れたというか、拍子抜けしたような顔をした。

「……これも霊泉の水、なんですすよね」

「ん？ ああ、そうだよ。使うなら帰りに汲んでけばいい」
「贅沢っていうか……」

「どうせ靈験は半日しか続かないし、飲み尽くすほど病人がいるわけでもないじゃん」

「そうなんでしょうけど」

決死の覚悟で、なんでもすると言つてまで欲しい水が、まさにただの湯水として使われていることが納得いかないらしい。

まあそんなのはどうでもいいのだ。

「じゃ、おっぱい触らせて」

「うう……はい」

先にボンボンと服を脱いで湯に飛び込んだ俺の満面の笑みに、ものすごく複雑な顔をしながら彼女も服を脱いでいく。

薄暗くて肌の白さが堪能できないのが残念だけど、月明かりでもわかるぐらいに綺麗な肌とボンキュッポンの完璧なプロポーションはたまらない。

「へへっ」

おすおすと近づいてきた彼女に、無遠慮に手を伸ばす。緊張しきった顔でビクツとする彼女だったが、お構いなしにむにゅつと乳房を掴ませて貰った。

「おお、すげ……こんなでっかいおっぱい、男爵のこの嫁さん並みだ」

「……も、もしかして頻繁に女の子の体触ってるんです

か？ その歳で」

「さ、さすがに触つてないよ。見ただけ」

男爵の奥さんは頼めば揉むくらいはさせてくれそうなのーちゃんだったが、そこまでしてバレたらさすがに親父が危ない。

覗いたり、たまにおばちゃんたちに引つ張り込まれて洗い倒されるだけならイタズラ小僧っていうことで許されるので、そこまでが俺のラインだったのだ。

しかし今は揉み放題触り放題の約束の最高のちちしりふともがある。それは見る専だった俺にとってはもう脳が痺れるほどの体験だ。

「うわ……やーらけ……」

「ん、う……っ」

相手がただのエロガキで、本当にただ触るだけとはいえず、恥ずかしいものは恥ずかしいだろうし決して愉快ではないだろう。それでも彼女は律儀に触られるまま、くねくねと身もだえしながら決して拒絶はしなかった。

調子に乗つて尻。そして性器も触る。

「ここがどうなってるのか、いっぺん思う存分確かめたかったんだよなー」

「そ、そんなっ……ひあつ……!」

湯気越しに遠目に覗くだけでは、股間がどうなってるの

かなんて決して理解なんかできるもんじゃない。それに毛だつて邪魔だ。

しかし驚いたことに、彼女は胸や尻はしつかりと発育しているくせして毛は生えていなかった。

「こんな風になつてるのか。そーいやエルフつて毛、生えないの？」

「わ、わかりませんようつ。純エルフの人たちの裸なんて、見たことありませんしつ……！」

「そつか。俺は毛がない方がいいな」

「あ、ありがとうございます……」

真つ赤になつて俯きながらだけれど、わりと本氣っぽい照れ方で礼を言うあたり、結構ズレた子なのかもしれない。

そんなこんなで本能の赴くままに尻を揉み乳を揉み舐めしやぶり。随分そうしてベタバタしていた気がする。

が、しばらくして浴場の入り口に人の気配がしたので、俺は彼女に抱きついたままピタリと停止せざるを得なかった。

「誰か来た……!」

「え、えっ?」

わざわざかがり火が消えてから温泉に来るなんて奇妙な話だ。洗いづらしい躰きやすすいばかりで不便なのに。

それともこのハーフェルフみたいな、いわくつきの客つ

てことだろうか。

「……………」

「……………」

二人でじつと息を潜め、闇に慣れた目で新しい客の動向を窺う。

二人組だった。温泉の流れる音に紛れて声は聞き取りづらいが、片方は男。

もう片方は……。

「……………きゃつ」

「?」

ハーフェルフの少女が息を呑んだ。

俺は……見えていたが、何をしているのかしばらく理解できなかった。

正体は宿屋の小間使いの娘と、男の方は多分旅人。連れ立って暗がりて服を脱ぎ、抱き合つて湯船の中で絡み合い……時々追加料金とかサービスとか小声で言い合っている

のが聞こえる。

しばらくして話が済んだのか、男のまたぐらに女がかがみこみ、何やらチュポチュポと音を立て始める。その時の俺には何をやっているのか全く想像できず、ただ本格的に

エロい何かをやらかしているのだらうということだけしかわからなかった。

じつとハーフェルフの少女を抱き締めながら、ひたすら息を殺す。

そのうち男の方が突然立ち上がり、女の頭を掴んで腰を振り始める。女の方も慌てたようにじたばたしたが、しばらくして諦めたのか大人しくなり、やがて二人とも動きが止まる。

そして虚脱したように二人とも湯の中にへたり込み、息を整えてからまた何か言い合いつつ出て行った。

「……な、なんだあれ」

「……………」

俺は目の前で展開された意味不明の光景に、すっかり毒気を抜かれていた。

意味がわからない。ドキドキするけれど、理解できない。目の前に極上の裸体があつて触り放題なのに、いきなり展開された他人の何かHな行動がショック過ぎて身が入らない。

なんだあれ。なんだあれ。と、ひたすら混乱していた。それはなんだかんだ言つてもポルカは道徳的な大人が多く、俺は女の裸は見まくつていてもセックスやフェラチオなんて知らなかったということだ。

それを偶然に目撃してしまったことで俺は飽和してしまつた。

が、ハーフェルフの少女はそうではなかつたらしい。

「……………」

「な、なに？」

「あれ、しましようか？」

「あれ、つてあれ、何？」

「……してみればきつとわかります」

多分スケベな手つきで撫でまわされて、俺が思っている以上の覚悟を決めていたのに寸止めで、ある種欲求不満だつたのだろう。

その時俺は初めて、目の前の少女が自分より年上で、自分よりおそろくは強く、自分がもう何の交渉材料も持っていないことに気づいたのだつた。

少女は俺の手を振り解くと、さっきの娘と同じように俺の股間に顔を近づけてきた。

俺のムケていないがピンピンに張つたちんこを見て、愛しそうに目を細める。

そして……あまり躊躇いも見せず、ちんこに口付けをしてきた。

「!!」

「ん……………」

ピクリと跳ね上がるちんこ。彼女はそれに驚いたように

ビクツと全身震えたが、再び果敢に口付けする。今度は離さないとはかりに口を開いて先端を迎え入れ、少しだけ開いた皮の隙間へ、にゅ、と舌を突き刺してきた。

「う、あ……！」

「んーっ……こ、こう……かな？」

「……も、もしかして自分で何やつてるのかわかってないの?！」

「ちゃ、ちゃんと知ってますっ！ でもその……話に聞いていただけなので」

女の裸の柔らかさに夢中になっていた俺と五十歩百歩だ。しかし彼女は年上な分だけ性行為の何たるかを知っている。少なくとも本能でおっぱいおっぱい騒ぐしかなかった俺と違って、最終的に互いのどの部分を使って何をするのがセックスなのかというところに関しては、正しい知識があった。

霊泉の間に俺のブザマな喘ぎ声と、彼女が懸命に吸いたてる音が響く。散々皮を弄んだ末、どうやら根元に向けて引つ張ればムケるということを理解したらしい彼女は本格的に俺を責め立て始めた。

「ん、んちゅっ……ん、んん……んぶ、んんっ」

「く、や、ヤバ、そんなキツっ……！」

裸の亀頭に襲いかかる湿った粘膜の感触。オナニーすら

まともに知らなかった俺にとつて、それは快樂というより拷問に近いものだった。

技巧自体は今考えると大したことはなかったが、セックスも射精も知らない俺にとつては未知の世界過ぎて悲鳴しか上げられなかった。

そして。

「う、うあ、あつ……なんか、うあ、うわあつ!!」

「ん……ぶ、ぶぷっ……！」

射精。

ハーフェルフの少女の美しい唇の中に、俺の、おそらくは生まれて初めての射精が打ち込まれていた。

それが射精だと知ったのはしばらく後だったけれど、俺はその時は全身が言うことを聞かなくなるような快樂で混乱していて、彼女の唇から垂れる白いものがなんなのかなんて全くわからなかった。

「……んくっ」

「……あ、ああ……っ」

ぱしゃん、とさっきの男のように湯の中にへたり込んだ俺を、彼女はうつつすらと微笑みながら見つめ、喉を動かした。俺の出した精液を彼女は自分から飲んでいた。

「………何、今のっ……」

「ふえらちおつていうらしいです」

「……ふえ、ふえらち？」

彼女は可愛らしく笑った。一瞬だけ見えた怖いくらいの欲情が消え、可憐な元の印象に戻っている。

「少しは、お札になったでしょうか？」

「……うん」

何のお札だっけ。

俺はそんなことさえ忘れるほどに、刺激的な体験に翻弄ほんろうされ尽くしていた。

それから、俺は彼女と数度の逢引を重ねた。

霊泉の水を受け渡すためだった。さすがに命に関わるというだけあって、一杯飲んだくらいでは快復しなかつたらしい。

しかし彼女も、夜行けば黙って温泉から水を取っていくぐらい簡単だつてことはわかつていただろうに、律儀に俺との受け渡しにこだわり……そして。

「ん、んふ、んぶつ……んんっ!!」

「出る、出るよっ……くっ!」

ドクン、ドクン、ドクンっ……。

森の傍の使われていない猟師小屋で待ち合わせ。

そしてすぐに絡み合い、彼女の口の中に射精をする。

俺は彼女のフェラと彼女の体に夢中になり、ただ彼女に触れ、彼女にちんこを啜えて貰うためにせつせと霊泉の水の配達を続けていた。

何度求めても彼女は拒絶しなかつた。むしろ嬉しそうに応えてくれた。

「……んっ、アンディさん……今日も、門限は九つの鐘で
すか？」

「ん、ああ……」

射精したらしばらく彼女の体を揉んで楽しむ。そして欲情し、ちんこがいぎり立つたらまた啜えて貰う。それを昼過ぎから夕方まで幾度も幾度も繰り返していた。

「あの、今日は……その、私の……えっですわね。んんっ」
「？」

「えと、その……本当は、おちんちんは口じゃなくて……
んんっ」

ほとんど丸裸になつて俺に乳を揉みしだかれているのに、肝心なことを口でできずに照れては咳払いを繰り返す彼女。

俺は純粹に意味がわからずに彼女の言葉を待つ。

「……いいです。今日のところはまたお口で」

そしてしばらく粘つては挫けたようにフェラチオを始める彼女が、なんだかわからないけれど可愛くて好きだった。

雪が溶ける頃。

俺と彼女の逢瀬にも終わりがきた。

もうすっかり彼女の友達も全快し、もはや理由もなしに待ち合わせては抱き合う日々が続いていた。

彼女たちは元々根無し草に近く、帰る場所もないのです。つとボルカの近くにいるつもりだったが、俺の方に鍛冶修業の話が持ち上がってしまったのだ。

「そんなっ……都じゃ、ますます会えないじゃないですかっ」

「うん……」

行き先は王都。親父も修業したという名門工房での修業で、最低10年はしごかれるという。

俺だっ行ってきたかったわけじゃないけれど、鍛冶屋の子が鍛冶をしないで何ができるんだと言われると答えに詰まる。あいにくと学もなければ剣ができるでもなく、親父の縁故の鍛冶まで嫌がったら、あとは乞食でもするしかない。

しかし彼女はメチャクチャに嫌がった。

「嫌ですっ！ アンディさん、行かないで！ 捨てないでっ！！」

「でも、俺だっって働けないと生きてけない。ハーフェルフじゃ王都は無理だろ」

「でもっ……でも、やだっっ！！」

いくらなんでも十やそこらの子供にそこまで入れ込むのか、と思うが、実際彼女はやたらめったら俺にこだわった。何かあの子なりに俺じゃなきゃいけないポイントがあったのかもしれない。

ハーフェルフの価値観はわからないので真実は未だに闇の中だけけれど。

「こんな耳がなければ……こんな切っちゃえば、アンディさんと……」

「え？」

顔を上げると、彼女は数払い用のナイフでいきなり自分の左耳を切り取るうとしていた。

動作に躊躇いはなく、あつと思ったときには耳の半分まで刃が入っていた。

「や、やめっっ！！」

あまりのことにびつくりした俺は後先考えずに手を出して、彼女のナイフを叩き落とした。

ガシャン、とナイフが砂利道に落ちる。

彼女の血と、俺の手のひらの血が、名残雪の上に点々と振り撒かれる。

「あ……っっ」

自分の耳も痛かろうに、俺の手の方の傷を見て顔面蒼白になった。

その時になつてようやく俺は彼女が俺をやたらと大事に思っていることを実感して、そのまま別れるのが惜しくなった。

それまでは彼女も俺と同じで、甘くて気持ちいい睦みの時間に酔っているとばかり思っていたのだった。

「……やっぱり、お前をただで置いていきたくない」

それは、衝動的で子供臭い思いつきだった。

俺はもう一度、彼女にわがまを言った。

「なあ、お前。なんでもするって言ったよな」

「え、ええ。なんでもします。なんでもするから……」

「ちよつと待ってろ」

家の倉庫には、俺の練習用にと、壊れた馬具や使い古しの鍛冶道具がたくさん転がっていた。

その中から鞍の締め紐といくつかの道具をほじくり出し、彼女の元へ駆け戻る。

そして彼女と抱き合った狐師小屋の暖炉で締め紐を黙々と加工した。

「このぐらいで切つて……ここが正面になるかな？」

「何……してるんですか？」

「まあ見てろ」

締め紐といつても太さは数センチある。なめし革のそれ

は子供用にならベルトにもできる頑丈なものだった。それを切つて、加工して、焼きゴテで下手糞な印字をす

る。
「……アンディ……スマイソン……アンディさんの名前？」

「そうだ。……できた」

出来上がったそれを念のためギユギユッと引つ張つて強度を確認。

そして、彼女に近づいて、その首に巻きつけた。

「これをこれからずつとつけてろよ」

「……これって？」

首輪だった。

ペットや奴隸には持ち主の名を入れた首輪をつける。長いことこの国には奴隸なんてものはいなかったが、俺は彼女にそれを強要した。

「これをつけてる限り、お前は俺のだ。俺だけのものだ」

「……………」

「人にはやらない。ずつとつけてろ。絶対だぞ」

「……はいっ」

ある意味とんでもない要求だったが、彼女は微笑んで了承した。

そしてそれから3日後、俺はホルカを出た。

それが、もう15年も前の話になる。

「だから俺にはハーフエルフの彼女がいるんだよ……ういつく」

「スマイソン十人長の脳内彼女の話が出たぞー」

「もうそんな時間か。おーいおカミさん、そろそろ勘定めてー」

「脳内って言うなバカー！ アホー！」

今の俺は王都にはいない。

はるかに馬車で10日。王国の南方に位置するセレスタ商国の辺境都市で、鍛冶屋ではなく兵士になっていた。

鍛冶修業の途中で南方のセレスタ商国との戦争が始まり、徴兵されて、訓練を受けてる途中で王都が落ちた。

あれよあれよという間にトロット王国を勢力圏に組み込んだセレスタは王国軍を再編制して軍団に組み込んだ。おかげで鍛冶修業に復帰することもできず、そのまま訓練兵から数えて7年、いつの間にやら小隊長指揮の十人長だ。

もつとも剣が使えないのは相変わらずで、南方らしい合理的なクロスボウ隊にいる。ダークエルフの発明品らしく、こいつの斉射の威力に王国自慢の剣聖旅団はあっさり壊滅したという。

そして見ただけで構造が読めて、こいつを修理できた俺は重宝された。わりとブライドが邪魔して冷や飯食らいが多い王国出身組の中で、いち早く馴染んで十人長になった俺はますます王都にもボルカにも戻れない。

「まあ、あれだな。ハーフは惚れっぽいんだよ」

「あんー？ あ、百人長」

酒に霞んだ視界を上げると、いつの間にか差し向かいにダークエルフが座っていた。

ディアーネ百人長。クロスボウ隊の総指揮官で、剣から体術から魔法から学問から、女だてらになんでもできてやたら強い人だ。

「ハーフに世間は冷たいからな。親にさえ疎まれる始末だ。そんな中で誰かにちよつと優しくされるとすぐコロツといく。お前の言うハーフエルフの子だって、わりと本気でお前に一生捧げようとしたと思うぞ」

「ですかねえ。だつたらいいなあ」

「よくないだろう。お前それを15年もほつぽつてて名前も覚えてないときた」

「うー……ちよつとド忘れしてるだけつすよー。シラフなら思い出せますつてー」

「お前からそのハーフエルフ彼女の話、私が覚えているだけで7回聞いている。一度も名前が出なかった」

「だーかーらー……うえつぷ」

ちよつと吐きそう。なんだかこの話になると酒の進みが速くなつて困る。

「それよりもつと他に思い出すことがあるだろう」

「……んー？」

「私はすぐに思い出した。ポルカのアンディ・スマイソン。私のこともちゃんと思い出せ」

いつも俺の思い出話になると百人長は真剣になる。なんか昔俺に会つたことがあるらしい。そんなこと言われても酒の入つてゐる時に思い出せつたつて、なあ？

「ちゃんと約束したことを思い出すまでお前は退官も出世も許さん」

「ひでー」

「酷いのはお前だ。ド忘れで済む話じゃないぞ」

「……また次回ー」

俺はいつものように白旗を揚げた。百人長は溜め息をつく。

酒盛りが終わると、大体俺は知らないうちに酒場の二階の宿に運ばれて朝を迎えている。

後で聞くと百人長が運んでくれているらしい。俺だつてチビじゃないのにあの人スゲー。

「……うー」

そして俺は二日酔い。

何かと飲み過ぎる癖は親父も持っていた。なんとかしたいが血筋じゃ無理かもしれない。

それもこれも、あのハーフェルフの思い出が悪いのだ。

あんまりにも強烈で甘美で、俺にとつて都合のいい記憶であるがゆえに、他の女じゃ比べてしまい、醒めて話にならない。

ただでさえ霊泉で磨かれたポルカの女に比べて王都やセレストアの女は平均レベルが低いつてのに、性格までスレてるときたら恋愛にならない。

ゆえに俺はポルカを出て以降百人長以外の女に触つた覚えがない。百人長も肩を貸してくれたり訓練の手当てをしてくれたりで別に色気のある接触じゃないし。

「でも百人長は……うーむ」

正直、悪くない。

無闇に贅沢な俺の感性をしても、百人長くらいの女となると惹かれるものがある。

おつぱいはでかいし顔は綺麗で、親切で理知的で気さくで偉い。

でもまあ、気さくとはいえ百人長は婚約者がいるという噂だし、夢を見るのも馬鹿馬鹿しい。

ポルカに戻れず、普通の女にも興味がもてない俺はこのまま童貞を生涯貫くのもかもしれない。

「はあ。やめやめ」

ちよつと切なくなつて俺は起き上がった。財布はいつものように百人長が預かつてくれてるだろうし、宿代酒代はそこから出してきているだろう。

と、ドアを開けようとしたら、ガチャリと向こうからドアが開く。

「灰色のマントに身を包んだ誰かが、俺が引く前にドアを押し開けてきたのだ。」

「誰!？」

思わず後ろに跳びすさる。

恨まれるような大それたこともしてない、狙われるほどの大物でもないつもりだが、暴漢だったららすごく怖い。セレストは治安が悪いから油断できないのだ。

マントの人影は滑るような足取りで素早く室内に入ってきた。

跳びすさつた俺に素早く肉薄。ナイフとかで刺すなら逃げられない距離に飛び込んで、俺の顔を下から覗き込んでくる。

その顔は、女で。

長い左耳の真ん中ぐらいで半分まで切れ込みが入つていて。首には古ぼけたポロボロの首輪がしてあつて。

「ご主人様っ!!」

「え、ええええええええっ!？」

彼女と俺の声が綺麗に重なつて、ついでに俺と彼女の唇も直後に重なつて、さらに直後に二人重なつて床にぶつ倒れて。

「何事だっ……あ、ええええっ!？」

どうやら一階で朝食を取っていたらしい百人長が吹き抜け一足飛びで二階に上がり、部屋に飛び込んできて、俺たちの姿を見て硬直した。

凍つた時間。

そこに遅ればせながら隊のみんなもドタドタと駆けつけてきて、俺に熱烈キスを続けているハーフェルフを見ていち早く叫んだ。

「お、おい! スマイソン十人長が脳内彼女本当に出したぞ!!!」

「む、む——っ!! ……ふはっ! 脳内彼女じゃねえ!!!」

「♪」

起き上がった俺の横で、感涙で顔をくしゃくしゃにしなから笑っている彼女は、ボロボロのマントをべいっと脱ぎ捨てて北方エルフ独特の草色の衣装を衆目に晒した。否。両の手で首輪をつまんで衆目に晒した。

「はじめまして！ アンデイさんの雌奴隷、セレン・スマイソンです！」

不穩すぎる肩書きと一緒に、何故か俺の苗字まで名乗っていた。

セレンというらしいハーフェルフの少女は俺に出会うよりずっと前から各地を放浪していたわけで、トロット王国以外の場所で「首輪は奴隷の証」という風習があるのも最初から知っていたらしい。

ところで、奴隷というものにもやはり種類がある。

ひとつはいわゆる労働奴隷。ひたすら肉体労働や汚い仕事をやらされる、金で売り買いされるアレだ。

もうひとつは……愛玩奴隷。

別名性奴隷、肉奴隷、雌奴隷。

ひたすらエロいことをするために買われる、専属娼

婦のようなやつ。

セレンはセレンなりに考えた。

俺の奴隷になれというからにはそのどちらかなのだと。で、俺がセレンに求めたのはエロいことばかり。となれば自明の理だ。

「だから……私はアンデイさんの雌奴隷ですよね？」

「……………」

「え、ええっ?! もしかして違うんですか？ 私労働奴隷の方なんですか？」

「いや、えっちな方で間違っではないんですけど」

「あ、あはは……よかった」

いいのかよ。

「これより軍事裁判を開きたいと思う」

無表情にディアアーネ百人長が宣言した。

沸き立つ部下たち。

「証人、ジャンジャック正兵」

「スマイソン十人長だけは信じていました。いつも童貞丸出しの妄想で酒盛りのたびに盛り上げてくれる俺たち男子の旗印だつて！ なのに！」

「次。ラックマン準兵」

「真っ昼間から女とイチャイチャするなんてセレストア軍の

川上にも置けねえだよ」

「風上だバカ。次、ゴート正兵」

「ばばば、ばんつみえてる」

「次。ランツ正兵」

「とにかくスマイソン十人長に事の次第をつまびらかにしていただきたい」

クロスボウ隊は暇人ばかりだ。

と思っていたら、騒ぎをようやく聞きつけたか、階段をがっしやがっしやと駆け上がってくる特徴的な足音が聞こえてきた。

「やべっ」

「アンゼロス十人長が来たぞー!!」

蜘蛛の子を散らすように逃げ出す仲間たち。

その人波を突破して、暑苦しい黒い鎧を着込んだ少年兵が部屋に飛び込んできた。

「何をやってるんですか!! ……本当に何をやってるんですか!!」

最初のは怒鳴り込み的な第一声で、その次はセレンにしつかり抱きつかれて頬擦りされている俺に対する驚愕きょうおつの声である。

クロスボウ隊は百人隊だが、どうしてもクロスボウだけ

で運用するわけにはいかない。奇襲に弱すぎるのだ。

それで奇襲に備えて隊中核には一小隊、十人分だけ歩兵枠がある。たった十人とはいえ虎の子のクロスボウ隊を守るだけあって精銳が揃っていて、特にハーフェルフのアンゼロス十人長はトロットの劍聖号にあたるエースナイトの称号を持っていた。

そして剣士らしく、ものすごく決まり事にうるさい。アンゼロス小隊は別名クロスボウ隊の風紀委員会と言われていた。

「なるほど。彼女が常々噂だったスマイソン十人長の」

「脳内彼女だ」

アンゼロスの冷たい声に百人長が重々しく頷く。

「脳内って言うなと何度言えば」

「そうですっ。れっきとした雌奴隷です」

「お前は黙ってお願ひ」

たしなめたが時既に遅く、アンゼロスと百人長が赤面していた。

アンゼロスはぶかぶかの黒い鎧よろいに顎あごを引っ込めるようにして俯うつむき、百人長はいらだつたように目を閉じて苦い顔をしている。

「……スマイソン、僕は君をもう少し真面目な人物だと思っていた」



「わ、私は例の話を信じていなかったわけじゃないぞ？
だが、その……話半分に分かざるを得なかったというか：
……ありえんだろう」

俺いつになつたらこのやるせない空気から解放されるん
だろう。

「と、とにかく！ そんな破廉恥な話は却下だ！」

「う、うむ、そうだな。兵士だつて人だ、故郷や脳内に恋
人や嫁ぐらいいいたつて構わないが、ここは仕事場だ。謹ん
で貰いたい」

アンゼロスと百人長がなんか勝手に解釈して勝手に決定
を下している。

それにセレンが真つ向から囁み付いた。

「もう15年待ちました！ これ以上は我慢できません、私
はアンディさん……ご主人様と一緒にいなきやいけないん
です！」

「そ、そんなことは知ったことじゃない！ 雌奴隷とかそ
んな、その、刺激的なものを名乗つてどういふつもりだ！
うちの隊の純朴な兵たちが、そんな言葉に踊らされて妄念
に駆られて罪に走つたらどうする気だ！」

さすがにそれは仲間たちを馬鹿にしすぎじゃなからうか。
「大体だな」

アンゼロスは続ける。チンガードプレートに口元を埋め

るような喋り方はくぐもつていて聞き取りづらい。

ただでさえ体が小さいんだから鎧を仕立て直すべきじゃ
ないだろうか、と鍛冶屋の頭でどうでもいいことを考える。
「本当はスマイソンの作り話を聞きつけて変装した、どこ
かのスパイつてことも考えられるぞ？ いやむしろそっち
の方が現実味がある」

「私アンディさん以外に用はないですから。アンディさん
さえ返してもらえぬなら別に今すぐ出て行きます」

平然とセレンは言ったが、ずずいと百人長とアンゼロス
は身を乗り出して目を吊り上げた。

「それは許可できない」

「そうだ。スマイソン十人長は我が軍の大事な人材だ！」
わあ。

俺こんなに大事そうな扱い受けたの初めてかもしれない。
なんか嬉しいけど喜んでいいんだろうか。

「そもそもだな、彼女とか婚約者というならまだしもわか
るんだ。それくらいなら誰にいたつておかしくない。ポイ
ド準兵にだつて美人の彼女がいるくらいだ」

アーニー・ポイド準兵。身長2 m 77 cmのオーガ族で人間
の彼女持ち。

すごく羨ましがられている。
それはともかく。

「だがいくらなんでも雌奴隷だなんて男に媚びるにも程があるだろう。恥ずかしくないのか」

「そんなことありませんーっ！ 本当に一生この人とエッチなこととして、この人のために働いて、この人のお世話だけして過ごしたって私は構わないもの。奴隷でいいもの」

セレンは子供っぽく、駄々をこねるようにして反論した。なんだかそうしていると15年前の彼女のイメージが蘇ってくる。いきなり大胆なことを言ったせいで、今まで微妙に距離感ができていたけれど、そうしてみると確かにあの少女だと思えた。

「そう思えるくらい本当に好きで何が悪いんですかっ！ あなただってハーフェルフなのになんでわからないんですか！」

「うっ……」
アンゼロスは後ずさる。多少は共感するところがあるのだろうか。

「私はもう離れないっ！ 邪魔するならひどいですよ！」
「く……こ、このエースナイトの僕に向かって恫喝するか！」

なんか俺がぼんやりしているうちにいつの間にか殺し合いでもおっ始めそうな剣幕になってきた。

どうしよう。でも喋ったら余計悪化しそうで喋れない。

「双方やめんかっ！」

百人長が強引に割って入る。

剣を抜こうとしたアンゼロスを蹴り転ばし、腰から護身の短刀を抜こうとしたセレンにポロマントを巻きつけて縛り上げた。

「ぎやうっつ!?!」

「んむー！ んむー！」

少年というより小娘みたいな声を上げて転がるアンゼロスト、腰から上をマントで封じられてじたばたするセレン。改めて百人長スゲエ。

「この件は私が預かる。今日はもう解散だ解散！」
助かった。

午前中に武器の整備をして、午後からは行軍訓練をしてから射的訓練をこなす。

これがクロスボウ隊の日課だ。

辛いなことに最近は大きな戦争もないので、専ら人里近くの魔物狩りくらいしかやることはない。それ以外はずつと整備と訓練だ。

騎兵隊や歩兵隊はキャラバンの護衛や迷宮探索、国境警備に回されることもあるが、クロスボウは野外戦専門で遭遇戦に不向きなため、楽をさせてもらっている。

給料泥棒と陰口を叩かれることもあるけど、戦争での有用性は誰もが知っているので、別に気になるほどのものじゃない。

で。

「1、2、3、4、めっすどれいっ♪」

「5、6、7、8、めっすどれいっ♪」

行軍訓練中からもうあからさまにニヤニヤされつつ変な冷やかし方をされている。

「お前ら射的訓練で的にすんぞバカ」

「やだなー十人長の話じゃないっすよー」

「今年の流行語大賞っすよー」

最低な仲間たちは最高の笑顔で弁解する。

ものすごい居心地の悪さだ。

「マジで撃つていい？」

キリキリキリと滑車で弓を引きながら言ったら、

「むしろ撃ちたいのは俺らなんだ」

オーガ族の隊員に指でパチンと弓引きつつ真顔で言われて土下座することになった。

俺十人長なのに。小隊長なのに。

そして夕方。

隊舎には風呂がひとつしかないのでみんなで汗を流す。

「よ、スマイソン」

「百人長」

そして百人隊唯一の女性であるディアーネ百人長は堂々とみんなと一緒に風呂に入っている。

ダークエルフ特有の小麦色の肌、綺麗な色の乳首や陰部も惜しげなく晒していた。

ちなみに百人長によると下の毛が生えないのはエルフの特徴らしい。

「毎度のことながらよく恥ずかしくないですね」

「戦場に何度も行っていれば慣れる。あそこには女子風呂

も女子トイレもないからな」

「よく襲われないですね」

「伊達に200年生きていないよ」

確かに武芸百般の百人長にかかれば、男だろうがオーガだろうが片手でシメられてしまう。

納得した。

「でもあそこでゴートとランツがマスかいてますよ。百人

長オカズに」

「いつものことだ。ほっておけ」

鷹揚おちよもいところだった。

「それにしても……どうしような、あのハーフエルフ」

「う……」

考えないようにしていたことをぼそりと言われて困る。

「追い返すわけにも……いかないか。帰る所ないからな、ハーフェルフは」

「ええ」

「でもどうする」

「……入軍させるわけには」

「クロスボウ隊に配属されるとは限らないぞ」

「そっか……ここ教練施設じゃないですしね」

「ところでお前も勃起ぼつきしてるな」

「ほっといてください」

「ん？ どっちで勃起した？ 私か、雌奴隷の方か？」

「百人長までエロに走らないでください、アンゼロスが飛んできたらどうする気ですか」

この人のエロ話はナチュラルすぎて、からかっているのか真剣なのか判断しづらいから、どこで注意したらいいかちよっと迷う。

百人長はニヤニヤしながら断言した。

「あいつは風呂には来ないよ」

「……言われてみれば見た覚えがないですね」

風呂どころか、鎧着ないで歩いていることすらほとんど見たことがない。エースナイトだから鎧が普段着なのだと言っていたが。

風呂上がりに服を着ていると、百人長の着替え籠から短剣が覗いているのが見えた。

「……その短剣」

見覚えがあった。

というか俺が打った数少ない刃物のひとつだった。

「お、スマイソン。もしかして思い出したか」

「……………」

体を拭いている途中だった百人長が期待した顔で寄ってきた。

「ちよっと待ってくださいよ？」

俺が打った刃物は全部で両の手にも満たない。

修業時代に作ったのはほとんどは農具や馬蹄で、さあこれから花形の武器打ち防具打ちの修業だ、というところで戦争が始まってしまったからだ。

その短剣は、工房の前でウロウロしていた変な人に打ったものだった。

「何してんのあんた」

「……こここの鍛冶屋は融通が利かんな。身分証明がないと打ってくれないのか」

「いや、そりゃ普通でしょ。もし敵国人だったら利敵罪だ

し」

「まだ戦争しているわけでもないだろうに」

「いつそうなるかわからないって言う話だからな」

変な人というのは、いかにも怪しい人ですつてな砂漠風のフードとマスクで顔を覆い、長い長いマントとロープで体の一切を隠していたからだ。

が、俺は当時工房でしょっぱい先輩職人にイビられていて嫌気が差していた。

本当なら刃物ぐらいバンバン打てる頃合いのはずなのに、先輩職人が面白半分で根も葉もない噂を流したせいで親方の覚えが悪くなり、いつまでもそつちの仕事場に入れてもらえなかったのだ。

だから、変な人の変な依頼でもいいから、ちょっとはやり甲斐のある仕事を求めていた。

「んで何、何が欲しいの？」

「……この剣を短剣に打ち直して欲しいんだ」

彼がおらずと差し出したのは、なめし革に包まれた一振りの剣……の、折れっ端だった。

「うわひでー。変な折れ方しちゃって長さも半端だなオイ」「駄目か？」

「まあ変な刃物になっていいんなら……できるよ？」

どうせ商売する気でもなく、相手も得体の知れない変な

人だ。変な仕上がりでも別にいいやと思つて気軽に言った。

「構わない！ この剣は昔さる高貴な方に貰った宝物でな、折れたままでは忍びないんだ！」

「はいはい。こんななつちやうよ？」

剣の形を見ながら地面に棒つききれて完成図を書く。

ヒビの形が悪く、普通の短剣に打ち直すのは難しく、トッブヘビーな形の、なんとというか鈍のような……それでいて普通の鈍の三分の一くらいの大きさの、なんととも言いがたい刃物になる。

「そ、それで……何かに使えるのか？」

「果物や手紙の封を切るくらいなら」

「……それでもいい」

「おっけ」

普通の工房なら溶かしてちゃんとした新しい刃物にするだろう。俺はそんな炉は使えなかったので、今考えるとなんか子供の工作のようなヘンテコ改造だった。

それでも一週間かかって完成した。

「ほらよ、切れ味だけは保証する」

元の剣がよかつただけの話だが、社交辞令的にそんなことを言つて彼に完成品を渡した。

「……ありがとう！ なんと礼をすればいいか」

「いらないよ」

出来上がった刃物のあまりの迫力のなさに自分でも「こりやねえな」と思ったので、金貨を取り出した彼を制して俺は背を向けた。

それでも初めて作った刃物で人が大喜びするのがちょっとこそばゆくて、それを商売の棹に収めてしまいたくなかったのもある。

「ま、待ってくれっ！ そ、そんな、でもっ！」

「いいんだよ。それでよかったら黙って取っついてくれ」

「……………」

彼が短剣を抱き締めるように大事そうに抱えたのを見て、俺は改めて工房に戻ろうとする。そこに後ろからまた声をかけられた。

「あ、あの、名前はっ!？」

「剣に名前なんてつける趣味ないよ。自分でつけて」

「そうじゃない、君の名前だっ！」

「……………」

スリード工房の……と当時の所属工房名を口にしようとして、特にそこで習った技術を使っただけでもないことに気がついて思い直す。ただの気まぐれの親切に、工房の名が上がっても癪だ。

「ポルカのアンディ・スマイソンつつたら俺」

代わりに将来、親父の店を継ぐ時のためにポルカの名前を出すことにした。

「……………変な人にこういう変な刃物打ったのは覚えてるんですが」

「変な人ではなくて私だ」

10年目の真実。

あんな恰好でわかるわけあるか。

「本当に嬉しかったんだぞ」

「……………え？」

「いいか、あの時お前は聞いてくれなかったが、私の故郷では人に剣を贈られたら求婚の証なんだ。金貨一枚受け取らなかったことで、あの時お前は私に求婚した」

「え、ちよっと……………」

「どんな形にしろ、異性にタダで剣を渡すなんて信頼がなくてできないことだからな。そうか、ようやく思い出したか……………」

裸なのを忘れて抱きついてこんばかりの百人長に俺は大事なことを指摘した。

「……………そもそも百人長っ」

「ん？ なんだ？ 雌奴隷くらいいても私は」

「いえその、あの時の変な人というか百人長は、異性かど

うかすらわからなかったんですが。それで求婚になるんですか」

「……………え？」

前のめりに手を広げて飛びつこうとした百人長はすっ止まった。乳だけが勢いでぶるんと揺れた。

部屋に戻ると案の定セレンが待っていた。どうやって調べたのやら。

「アンディさん、おかえりなさい」

「……………あ、あーと……………うん、ただいま」

何か言おうとして、いろいろ考えて、よく考えたら別に俺は追い出しにかからなくていいじゃん、と思いついてただいまを言う。

そうだ。俺は今のところ彼女一筋なんだから、後ろめたいことは何も無い。

「あ、そうじゃなくてご主人様でしたね」

「……………どつちでもいい」

いくら幼かったとはいえ、自分の幼稚な独占欲に律儀にずっと応えようとしてくれてくれた彼女に感激する。

「……………ん、っ」

「む……………」

どちらからともなく、キス。そして服を脱がしあう。

15年前、毎日のように繰り返していた幼く淫蕩な行為。何年経っても変わらない彼女の感触が、俺をあの頃のエロガキに戻す。

「……………えへへ。アンディさん、変わったけど変わりませんね」

「よくわからない言い方だな」

「甘え甲斐のある体つきになったのに。私への甘え方はちつとも変わらないから……………」

「……………悪いか」

「いえ、嬉しいです。私にとっては二倍素敵……………んっ」

ポリュームのある胸を持ち上げるように揉みしだき、はしたなく勃起した乳首を両の指でコロコロさせる。それでは足りなくなつて片手で体を抱き寄せながら胸を食み、もう片方の手ですべらかな腰のラインを滑り抜け、やはりムチムチした尻に手をやった。

「や……………ん、ほんと……………アンディさんだあ……………アンディさんが私を愛してくれてるっ……………」

「スケベ根性が変わつてないだけかもよ」

「いいんです。エッチでいいんです。それで私のことが必要ならいいんですっ」

「……………ほんと健気だな、お前」

「アンディさんに必要とされるなら、アンディさんが私を

抱いてくれるなら、贅沢なんて言いませんっ……食べるように私を抱き締めてくれたあの時から、ずっと、大好きなんですようっ……」

ありとあらゆる場所を指で賞味されながら、セレンは俺をぎゅうぎゅう抱き締め、少しでも寂しさを埋めようとす

る。
15年の永きにわたる別離は、一度の抱擁では癒せない。そう言っているかのようなラブラブぶりだ。

「あの……アンディさんっ」

「ん？」

「今こそ……いまなら、言えます。私とセックスしてください……私のヴァギナで、赤ちゃん袋で、アンディさんのおちんちんをフェラチオさせてくださいっ！一杯飲ませてくださいっ!!」

「……う、うん」

真っ赤になりながら、それでもよどみなく淫らな言葉に圧倒される。

ずっと後悔していたのだろう。はつきりとそれが言えなかったことを。

俺の頷きに、顔をくしゃくしゃにして笑い泣きをして、熱烈に口付けをしながら俺を押し倒して腰を擦り付けてきた。

股間と股間、性器と性器がくっつき合う。いつから俺に抱かれることを想像していたのか、セレンのヴァギナはドロドロに熱い液で潤っていた。

俺はキスされたまま手で竿を動かし、狙いを定める。セレンは俺に吸い付いたまま腰だけで位置をつける。

そして、俺が突き上げるその前に、セレンは強引に腰を下ろしてきた。

「……………!!」

「んぐ……ううっ」

ぶちちち、と一気にセレンを貫く感触。引つかかった感じは処女膜だろうか。確かめる間もなく、彼女自身の力で一気に奥底まで貫通してしまった。

「……ん、ふっ……あははっ……やったあっ……アンディさんに処女、あげちゃったあっ……」

「お、おい、セレンっ!!」

「……えへへっ……わかりますか……しっかり、はいっってますよおっ……」

あまりの痛みに気が触れてしまったのかと思うぐらい、セレンの言葉に力がなく、それでいて白痴にも似たぼんやりした笑みを浮かべていた。

しかしそれは、痛みを我慢してそれでも笑おうとした結果。少しでも痛みを氣遣われなくなかった彼女の、飽和す

るような気合と努力だった。

「……えへ……っっ」

そしてなんだか怖くなる俺を見下ろしながら、処女を失ったばかりの膣を使い、俺の肉棒にフェラチオし始める。

あの時のように。

あの頃の、いつものように。

これからいつでもそうなるように。

それが当然であるかのように。

俺の肉棒を喜ばせる術を知り、学び、鍛えようと努力を始める。

彼女は思っていた以上にあの時のまま、俺を愛していた。

「う、うあつ……ああつ……すごいっ……お腹の中、持ち

上げられてるみたいっ……私の体、全部あなたにあげてる

感じがする……あなたのために使ってる気がするのっ……

……!!

「あ、ああ……すげえっ……すげえよっ……お前っ……

……!!

「えへへっ……ありがとう、ございますっ……!!」

セレンは強引に、無理矢理に、ガクガクと腰を振りたくる。

股間の血をわざと振り撒いているかのようなそれは、色気もなく、淫らでもなく、ただひたすらに愛情だけは溢れ

ている。一途に俺の快楽を追求する、それができるといいう宗教的なまでの高揚に浮き立っている。

そんな痛々しくもまっすぐな愛に、俺の15年間休業中だった童貞棒がいくらかも持つはずがなく。

「んぐあ……!!」

「え、あ、ビクッて……あ、う、あ、出てる、精子が、私につ……アンディさんっ、アンディさんっ！ 大好きですよっ!!」

ドク、ドク、ドクッ……!!

俺の精液は凱歌を挙げるように、彼女の中に殺到した。

◇◇◇

「ういっく」

「……百人長が酔ってる」

「どんだけ飲んだんだよ。……あ、見ろ、お力ミさんが『オ

ーガキラー』の樽にバツつけたぞ」

「恐ろしい……恐ろしいお人や」

「うう……もうやらあつー」

「……どうしたんですか百人長」

「ああ？ ……あー、あんぜろす……きーてよー……うえ

えん……うええええええんっ！」

えん……うええええええんっ！」

「ひ、百人長!?」

「おい、百人長が泣き出したぞ」

「……………あれはあれで!」

「あの百人長が……………お、俺は萌えて言葉を理解しようとしてるのかもしれん……………」

「ええと……………つまり婚約者に逃げられてしまったと?」

「ちがーうのー! ……こんやくじたいカンチガイだっていわれちゃーったのー! ……すきだったのにい……………らしいすきなのにいっ!!」

「……………あ、あれだけ百人長に熱愛される奴がいるのか?」

「理論上ありえないんじゃないか」

「ひ、ひとつだけ言えることがあるとすれば……………開廷せざるを得ない……………」

「ああ……………俺たちの軍事裁判をよ……………!!」

「百人長、落ち着いて、それならまだ大丈夫ですよきっと、嫌いだって言われてないなら目はありますよ」

「……………あう……………」

「百人長は我が軍でも有数の器量よしと言われる方ですか

ら。まだまだその人にはわかっていないだけでしょ。あなたの魅力が」

「……………え、えへへ……………そっかなあ……………そだねえ……………まだあきらめることないかも……………くー」

「……………お力ミさん、お部屋空いてます?」

「アンゼロス十人長め余計なことを……………!!」

「いや、でもここからもししたら百人長の恋する乙女モードがまた見られるかもしれん」

「バカ野郎! 百人長を自分に振り向かせたくないのか! 他の男がいたら無理だろうが!」

「なんだその強気に弱腰な態度は。そんなだからお前は彼女できないんだよ」

「うるーせーえー! 彼女持ちは死ぬね! 百人長は俺の嫁!」

「もつだめかもわからんね」

◇◇◇

「ぶえくしっ」

なんだか妙な寒気がした。セレンは幸せそうに気絶している。

クロスボウ隊の陣地はトロットとの国境近くの山沿いに

ある。

緑は豊かだが魔物はおらず（出てきても隊全員で針山にする）、畑もほとんどない。人が立ち入らない地域のド真ん中にぼつんとある。

なんでそんなことになっているかというのと、原因はうちの主力兵器であるクロスボウの長射程にある。

常に出来る限り射程ギリギリから撃つ関係で、広い演習地域をとらないと話にならないのだ。

で、一度侵入した盗人を離脱前に狙撃した際、あまりにも遠くから盗人の足をプチ抜いたので「新兵器の射程は30km、見えないほどの遠くから百発百中」と無責任な噂が流れて近場の住民も陣地に近寄らなくなった。

実際のところはそんなには飛ばない。当たり前だが。

まあそれはともかく、とにかく人里から遠いので、酒を飲みに行くのも片道1時間近くかかる。

酒に弱い奴が仲間に引つ張られることなく、酒場に置き捨てられるのもその辺が理由だ。俺とか。

本来兵士なんて上客もいいところのはずの酒場でさえそんな遠いので、品揃えのいい便利な商店となると、馬でも使わないと減多に行けるものじゃない。

自然と買出しは代表制になり、当番制になり、定期的になる。

で。

「……こんな準兵の連中の仕事にすればいいじゃねーかよー」

「軍務に直接関係ないのだから階級を盾にしてはいけない」

「だーけどさー……せつかくの休みなのに。この時間をもつとさー」

「君ときたら……そんなに例の雌奴隷と破廉恥な午後を過ぎたいのか！」

「当然だ！」

胸を張ったら御者台から氷点下の視線で見下げ果てられた。

「ごめんなさい正直すぎてごめんなさい」

「君は土下座しながら全然反省してないな！」

アンゼロスにもものすごい怒られる。

アンゼロスの機嫌に関係なく、空は快晴。馬車も快調。

久しぶりに飛龍便も見えた。

今日はいいいことあるといいな。

地方都市パツソン。うちの陣地から一番近い街だ。

トロットからの街道筋にあり、交易拠点として最近急激に発展している。

ちよつと前までは貿易がほとんど途絶えていたので寒村みたいなものだったらしいが、セレストが無理矢理こじ開けたので目に見えてメキメキ広がっていた。

陣地とは逆方向に。

どうしてもうちの陣地は恐怖スポットらしい。

まあクロスボウは新兵器だし、流れ矢が怖いのはわからなくもないけど。

「注文票は？」

「ある」

アンゼロスが懐から羊皮紙を取り出そうとして、黒い鎧の中に手を引っ込める。亀みたいだ。

「……逃げよ」

「!! い、いきなり何を言ひ出すんだ君は!!」

真っ赤になるアンゼロス。

そこまでその鎧とか、鎧着る習慣で大事なもんか？

「こ、こんな公衆の面前で……」

「お前の脱衣シーンなんて誰も喜びやしないだろ。邪魔つけなら脱いで馬車に載つけとけよ」

「なっ……う、うー……む」

アンゼロスは百面相する。

怒り、呆然、困惑。

一通りうろたえた後に、ふーっと息を吐いて落ち着いて、

キツと俺を見上げて反論する。

「……君には無関係だろう。この鎧は僕の都合だ」

「そりやそうだけどさ」

しかし気づいているのだろうか。

バカごつつい黒い鎧を着たチビ兵士が、両腕を胸鎧に引っ込めてもぞもぞと体をまさぐる行動は、どっからどう見ても滑稽なのに。

「あつた」

すぼん、と両手を出す。やつぱりギャグだ。

「まずは煙草、髑髏印を五箱。ねこみみ印を三箱。安いインクを六瓶。陶コップを八つ。あと……な、なんだこれはっ」

「どれ」

アンゼロスの背後から羊皮紙を取り上げる。反射的に取り返そうとしてパタパタ手を伸ばすアンゼロスをいなし、日に透かすようにして読み上げる。

「……セクシーオーガとエルフスイートナイトの最新号？」

「わーっわーっ！ バカ！ 昼日中から往來の真ん中で読み上げるな破廉恥スマイソン！」

どつちもわりと有名なエロ絵巻。

トロットでは紙の生産量や印刷技術の関係でエロ絵巻な

んで存在自体ありえなかつたが、セレストアのいいところは
こういうゾクな文化の進みが早いところだ。

しかしこんなの人に頼むなよ。

「売ってんのかなあ。エルフスイートナイトなんて前号出
てからまだ1年経ってないと思うんだけど」

「どっちにしても買わせないぞ」

「ひでー、これを楽しみにしてる兵たちに申し訳ないと思
わないのか。そんなだから百人長が風呂でオカズにされる
んだ」

「お、オカッ……なな何を言い出すんだバカ!!」

常々思うがこいつは純情すぎる。本当に成人してるのだ
ろうか。

一通りの買い物物を済ませて遅い昼食。

アンゼロスは相当俺に対する文句が溜まっているらしく、
料理を待つ間からもう説教が始まった。そして食事をしな
がら続けている。

「大体だな、君は人の命を盾にとつて女を陵辱するなんて
人間として最低の行いだと思わないのか」

「陵辱ってほどじゃないぞ。せいぜいセクハラ」

「陵辱だ。陵辱なんだ。君は認識が足りていない」

「でも合意が」

「ハーフェルフは流されやすいんだ！ 特に未婚のハーフ
エルフは異性愛にもすぐ流されやすいんだ！ そこを
突いて結果的に和姦になっただけで君が卑怯な行いをした
ことには変わりないんだよ！」

「なんかお前他人事みたいだけど、お前もハーフェルフな
んだよな」

「ああ」

「流されたことあるのか」

「ない」

自信満々に胸張ってそんなこと言われても。

「それだけ力説するからには首都あたりの親切な人妻相手
に熱愛経験でもあるのかと思つてた」

「何故人妻なんだ」

「なんとなく」

はあー、とアンゼロスは息を吐き、口元をナプキンで拭
く。俺をイビつても反省しないことに、ようやくと気づい
たか。

「お前黙つてれば美少女と間違われるぐらいの顔してるん
だから、面食いを一人二人引っかけてそうに見えるんだが
な」

「……び、美少女」

一瞬止まって赤面し、ごしごしと口元を拭く速度が

上がるアンゼロス。

「……つて君は何を言ってるんだ。僕は男だぞ」

「知ってるけど。たまりにエルフの血つて卑怯だなーとは思う。男でもそんな美人に生まれるとかありえねーよ」

「……美人」

こっちは妬みで言ってるのに嬉しそうな顔されると困るんだが。

いつものようにチンガードプレートに口元を引っ込めて表情隠してるつもりなんだろうが、そこまで嬉しそうな顔されると……コイツ実は衆道の人なんじゃないかと疑いたくなる。

椅子を引いてちよつとだけ距離を開けた。

体格的には小さいがこいつはずごい強い。

きつと攻めた。

でも俺は入れる方だいたい。

「も、もう帰ろうぜ」

「……？」

不思議そうな顔をしていたが、理解しなくていい。頼む理解しないで。

アンゼロスの中のビーストが目覚めないようにしばらく距離を取ろう。

隊舎に戻ると演習場に飛龍が鎮座していた。

「うおっ」

たじろぐ俺。

なんとなく俺を背中にかばうアンゼロス。頼もしい。

「あー、あー、ビビるなビビるな。飛龍便だ」

百人長が疲れた顔をして隊舎から出てきた。

飛龍便。要人の護送や急ぎの伝令、特別偵察に使われる特科兵。まさかウチの陣地に来てるとは思わなかった。

警戒を緩めつつ百人長に目で説明を求めると、ぐりぐりと頭を掻きながら百人長が口を開く。

「北方軍団の参謀本部から緊急指令。ヴィオール峠に出たマッドウルフを一掃せよとな」

百人長の後ろから現れた伝令兵が頷く。

百人長の説明はラフだったが、一応儀礼上伝令の目を無視するわけにもいかないので、アンゼロスと一緒に右拳を左胸の前にビツと構えて敬礼のポーズを取る。

「マッドウルフの数は」

「少なくとも百近いらしい。国境警備の歩兵隊が奇襲されて大敗走とか言っていた」

「気の毒に……」

マッドウルフ。この地方の代表的な魔物のひとつで、普通の狼が悪い気の流れで変異する変異体らしい。

狼のくせに馬のような巨体になり、周囲の動植物を見境なく食い始める。

食うものが視界に見当たらなくなると勝手に共食いを始めるので、ほっとくと凄惨な破壊を残しつつ最後の一匹になって餓死するが、これを普通に待つと1ヶ月はかかる。

ヴィオール峠は交通の要所なのでそれを待つことはできない。クロスボウ隊の出番なわけだ。

「出撃準備！ 明朝までに決着をつける！」

「了解！」

俺とアンゼロスは競うようにして隊舎に飛び込んだ。

夜半。

昼の快晴をそのまま継いで、何もない空に綺麗な月が浮かんでいる。

ヴィオール峠の切り通しの手前、約1km弱。遠すぎて普通ならが見えないところだが、そこにクロスボウ隊は戦術展開を開始した。

「全員配置についたな。最終確認」

「アイザック小隊問題なし」

「ウィリアムズ小隊問題なし」

次々と報告がよどみなく重なっていく。

大声での報告などなされない。各十人長がクロスボウの

ストックに嘯くだけで百人長に伝わっていく。

ストックそれ自体が百人長と共鳴しやすいよう加工された一種の魔術符であり、これがセレストアのクロスボウ隊の強さの秘密でもあった。

「スマイソン小隊問題なし」

「アンゼロス小隊準備よし」

「よし。それじゃ……状況開始」

全ての報告を聞き終わって、百人長が陣頭に立ち、五指を突き出すように構えて小声で呪言を唱えだす。

指先から糸のように流れ出した光の帯が、空中で織物のように美しく交差していく。

魔法。

エルフ族などの一部の種族が得意とする奇跡の技だ。

しかし何でもできそうなイメージの反面、戦争での使用例は非常に少ない。

百人長はそれを「火打石や雪球で剣に挑むようなもの」と表現する。

確かに超常の技は起こせるのだが、それで火や氷を作り出して戦うのは起こせる現象の規模や速度から全くもって現実的ではないのだ。

熟達の魔法戦士と呼ばれる人種も、戦いながらやれるこ

と云ったらしいが、幻影を見せて隙を作ることぐらいだという。頼るには頼りなさ過ぎる技である。

しかしクロスボウ隊は魔法を併用することによって劇的な戦力向上が見込めた。

「撃ち方用意!!」

例えば、それは「視力向上」。

1 km先の目標を手にとるように視認できる。

「目標、『見えて』ない奴はいないな!」

そして「目標指定」。

幻影の応用で、次に撃つべき目標が視界を邪魔せず、視界に重なるようにポイントされる。

オーガ兵が立ち上がって両の手に一本ずつのクロスボウを構える。ドワーフ兵が岩の上をあつらえた銃座のように使い、しっかりと狙いを定める。

「撃てっ!!」

ガガガガガガッ!!

夜空を鋼矢が切り裂いていく。殺気さえ感じ取れないほどの距離から飛んだ矢が、効率的に暴力的に、狂った魔物たちを一瞬で絶命させていく。

クロスボウの命中率はそれまでの弓矢と比べるべくもない。その上下ドワーフ謹製の遠眼鏡に匹敵する視力と、確実

な目標指定、攻撃指示に基づく統制射撃。

本来起動が遅く、効果が低い「魔法」だったが、それは射撃の補助としては恐るべき効果を発揮し得る。

北の森のエルフが何故あれほどまでに強かったか、今の俺にならよくわかる。これだけのガイドがあれば、人間の心臓なんて馬よりデカいことになる。

しかし恐るべきは、その力を百人単位で実現する百人長の実力であり、発想力であり、この命中率を実現するクロスボウだ。俺が直接戦う相手じゃなくて本当に良かった、と、次々に狼の化け物を虐殺しながら感謝する。

「……チッ」

「百人長?」

虐殺が終わる頃、百人長が舌打ち。

背後にいたアンゼロスに手信号で命令を出す。これは言葉よりも早く確実に伝わることもある。それだけ急を要する事態だった。

横目で信号を盗み見ると、内容はこう。

——撃ち漏らした、左の藪から来る——!

「げっ」

慌てて俺は弦を巻き上げるのをやめて隊中央に向かつて転げる。最左翼は俺だったのだ。

直後、藪から燃えるような色のマッドウルフの目が見え、

牙が飛び出してくる。

それを事もなげにアンゼロスが迎撃した。

「ちえやあつ!!」

抜きざまにマッドウルフの口元に一閃。牙が一撃で全部叩き折られる。

彼の使う剣は大仰な鎧に比べて圧倒的に小さく手ごろな、どこにでもあるショートソード。それでも剣であることに変わりなく、エースナイトは剣さえあれば、完全武装のオーガ正兵五人に匹敵する力を持つとされる。

「もらった!!」

ザンツ!!

……返す刀は牙粉碎のショックに悶えるマッドウルフの首を切断。

一瞬を置いて、ドウ、と地に伏す首なしの大狼。

アンゼロスは^{ほほし}進る血を浴びながら剣を振り、ゆつくりと掲げて小さく祈る。

エースナイトの一騎打ちの勝利の儀礼だ。

戦闘は、たったの7分で終結した。

誰も怪我することなく、無事に戦いが終わった。

圧倒的勝利。今仲間たちは切り通しに散乱するマッドウルフや歩兵隊の死骸を片付けにいつている最中だ。

そして俺はというと、……最後の奴の噴出する血をもちにぶっかけプレイされて、百人長許可のもと、近くの池に洗い流しに来ているのだった。

「えへへ。はい、ぬぎぬぎしてくださいねー」

「……………」

そして、ついでにセレンも現れていた。

出撃前に「軍務だから絶対についてきちゃ駄目」と言い含めておいたのに、徒歩で馬車についてきたらしい。

戦闘中の俺の一瞬の危機に、あわや飛び出そうとしていたという。そんなことしたらまたアンゼロスに何を言われるかと思うと、よく我慢したな、と思う。

「よしよし。えらかった」

「ふふっ」

別に褒めるようなことでもないと思うが一応褒めて頭を撫でておく。セレンは猫のようにしがみついて微笑んだ。

いろいろ安上がりな子だよなと思う。

「つて、血がついてるのに抱きつくっなっ!」

「あ、あれ?」

そして多分天然系だ。

仕方なくセレンの服も一緒に洗うことにして、二人で素っ裸で池に入る。

煌々と輝く月明かり。水面の照り返し。山の澄んだ大気の中で見るセレンの全裸は、やたらと神秘的で芸術めいて、それでいて確かに躍動する生命力を感じた。

大自然の中、自分も彼女も場違いに裸。セレンの無邪気な笑顔を見ているうちに、俺の下半身はムクムクと成長しだしていた。

「……えへへ」

「セレン」

「……………セックス、します？」

「いいのか？」

「いいに決まっています。アンディさんとならいつでもどこでもえっちなこと、できますよ。だって私は雌奴隷だもの」

「……………」

彼女は俺の何もかもを全肯定する。俺が求めるよりもっと上を捧げようとする。

それが不可解で、たまに怖い。もしかしたら俺を愛しているなんていうのは言い訳で、何かの理由で何もかもが嫌で、ただ捨てたくて捨てただけなんじゃ、と思ってしまうほどに。

そんな疑問をなんとなく感じたのか、セレンは複雑な顔で笑う。

「アンディさん。私はね……ハーフェルフはね。なんにも

持っていないんです。どこにいても何も持てない。持って歩けない、持って来れないんです」

「……………？」

「その人間の偽者で、エルフの偽者で、国民の偽者で、魔物の偽者なんです。だから……例えば、本当の何かを見つけたら、偽者だらけの自分も、手ぶらの空虚な過去も、……もしも捨てられた後なんて心配も、何もかもいらぬから、本物が欲しくなるんです」

「それが……俺？」

「いいえ。あなたのことを好きな気持ちです。多分、どんな種族よりも本当の、本物の情熱です。あなたとの出会いは最初が変だった、なんてこと、私だってわかっているんです。でも最初とか末路とか、そんなのは好きって気持ちとはなんの関係もないんです」

俺の手をいつものように自分の胸に導きながら、俺の腕の中に収まるように身をこじ入れ、水に沈み込みながら、セレンは囁き続ける。

「同じハーフェルフの友達が言っていました。だから、雌奴隷になりましょうって」

「……な、何それ」

「たとえあなたが知らないうちに誰かに取られていても、たとえあなたが全てを失ったとしても、私はあなたの傍に

います。あなたが死ぬまで私はあなたのものです」

一拍。

「奴隷をお金で買うように、あなたは私を愛で買いました。奴隷が自由になるために働くように、私は束縛されるためにあなたを愛します。私たちの言う雌奴隷ってそういうものなんです。それだけでとても幸せな人生なんです」

「……わかんねえ」

「でしょうね。わからなくていいんですよ。他人の幸せってそういうものですから」

クスクスと笑った彼女に嘲りも失望もない。ただ、嬉しくてしょうがないというように。

俺たちから見てそれは狂的であり病的かもしれないけれど、それは彼女たちの普通なのだ。何の不足もない幸せなのだ。今の俺にはそう納得するしかなかった。

「……入れていい？」

「ええ。アンディさんっ……大好きです」

水の中から立ち上がり、彼女の尻に腰を近づける。

幻想的な月明かりに照らし出されて、薄く青白い光を纏ったような体は本当に美しかった。

その美しい少女が俺にメチャクチャに犯されるのさえ心待ちにしているという事実、異常に興奮した。

「ふあ……あ、ああっ……ひああっ！」

「っ……く」

ずいゆにゆ、と熱い膣の中に潜り込んでいく。肌も膣口も、触った瞬間はヒンヤリと冷えているのに、すぐに燃えさかるように熱を帯びてゆく。

彼女そのもののような感触だった。あの雪の日に戸惑いながら抱かれた彼女が、いくらもしないうちに一生を捧げる情熱に駆られたように。

腰を動かす。

パシヤン、パシヤン、と膝上までの水が腰の動きに合わせて音を立てる。

「ん、ふん、ん、あっ……あ、ああっ、いいっ……いいっ!!」

「いいか？ 気持ちいいんだな？」

「はいっ……はいっ、気持ち、いいですっ……今日ずっと待ってた……1日中アンディさんにまた犯される想像して濡らしてましたっ!!」

「変態雌奴隷だな……!!」

「はいっ!! 変態ですっ!! 変態でいいんですっ!! アンディさん以外の何もかもに蔑まれる、アンディさんに夢中の変態雌奴隷でいいんですっ!!」

「ああ、それでいい……それでいいっ!!」

ムツチャクチャに腰を振る。セレンの二の腕を掴み、馬

の手綱を引くように自由を奪うセックス。

それにさえセレンは舌を出して喜んだ。俺とのキスをせがんで、キュウキュウと締め上げながら自分で腰を押し付けてきた。

その健気な動きが、あまりにも良くて、やっぱり経験僅少な俺は耐え切れない。

「う……く、出る……出さぞ」

「はいっ……出してくださいっ！ 赤ちゃんできてもいいです、あなたの赤ちゃん産むための子宮ですからあつ……どんだん流し込んでください、いつでも、どこでもっ!! 待ってますからっ!!」

「……んくっ!!」

やっぱりちよっぴり狂的で、ちよっぴり重すぎるほどの愛。

だが女の子に愛されるなんてことを知らなかった俺には、そんな負荷のある愛さえ嬉しくて。

ドクン、ドクン、ドクン……と、今日も激しく射精した。

「ふあ、あ……ああつ……しあわせ、です、ようっ……」
セレンはうっとりとして呟いて虚脱した。

そのまま後ろから抱き締めて、繋がったままばしやりと後ろに倒れ、二人で月を見上げながら水面を漂う。

しばらくすると足音が聞こえてきた。

「!!」

「待って」

立ち上がりそうになったセレンを制し、そのまま漂うことにする。

探しに来た仲間とかだったら、今大慌てで岸に戻っても冷やかしを受ける結果は同じだろう。少しでもやり過ぎる可能性に賭けようという算段だった。

「……………」

岸でしばらく逡巡するような間。

そして、意を決したようにカチャカチャがっしやん、という音が聞こえてくる。

そして衣擦れ、ちよっとした溜め息。

「……………」

探しに来た仲間ではないことは確かな気がする。どういうことだろう、とそーっと首を上げてみると、そりやそーっと上げてみればとるかポタポタとか音はする。

そして相手はこっちを向いた。

「!!」

「えっ」

長い長い髪と、華奢な体躯。ふくらみかけのささやかな胸、そして長い耳。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>